

7月の行事予定

25日 正副会

31日 休開市検討会

組合の異動

6月初日組合員総数256社

27日 セルフィッシュ（加盟）

7月初日組合員総数257社

【さかなの動き】上乾チリメン 卸値上昇4000円

大阪本場 不漁で不足感広がる (7月8日みなと新聞)

大阪本場における7月上旬の上乾チリメンの中心卸値はキロ4000～3500円。前月上旬から200～700円上がった。品質が良いのに加え、不漁による市場内の不足感に伴い、中心相場が押し上がった。主な水揚げ産地は愛知、茨城、徳島、広島、愛媛などの各県。入荷産地は兵庫と香川などが中心。魚種はカタクチで、魚体が2・5～3センチの中小筋、体色は白色。大阪本場の仲卸の買い付け意欲は高くない。在庫があるため、買い足す程度。ただ、6月の水揚げ傾向が例年と異なったため、在庫量は不十分なもようだ。量販店などの小売は、相場が6月下旬ごろから強含みに転じたことに加え、気温の上昇によって需要が落ち込むため、販売に力が入らない。創作チリメンなどの加工業者、ホテル、飲食店など業務筋の引き合いは依然、国内外の観光客数が多いため強い状況が続く。卸担当者は今後の相場について続伸と見通す。「水揚げが今月中に上向くことを期待している。現実的には、秋漁が始まる9月末か10月上旬までまとまった漁はないだろう」と関係者は話す。釜揚げシラスの中心相場は前月上旬に比べ300～400円高のキロ1800～1600円。

【さかなの動き】カキ 冷凍フライの高値相場緩む

宮城産むき身、減産で終了 (7月9日みなと新聞)

宮城産のマガキむき身生産が6月末までに終了した。今期の宮城県漁協の共販実績は数量が前期比15%減の約730トンだった。高水温などで全国的にカキのへい死が目立っている中、宮城県も減産傾向に歯止めがかかっていない。広島産むき身は5月末に生産終了し、以降は冷凍カキフライの商談がメーカー・商社と量販店・飲食店らの間で行われている。7月上旬現在後半戦に突入している。

(右欄上に続きます)

前半戦の商談は前期の高値相場が緩み「下げ展開」で成約が進んだもよう。前期の冷凍カキフライは広島産、韓国産ともに原料のむき身相場が過去最高水準となり値上げを実施した。結果、スーパーの惣菜売り場などでの売れ行きが鈍り、今期商談前から「在庫水準が高い」との情報が出ていた。一方で、今期の新物原料の生産量に関しては広島産が「ほぼ前期並みか若干少ない」、韓国産は「（輸入が）減る」と予想する声が多い。韓国産冷凍カキの5月輸入数量は前年同月比42%減の605トン、平均単価は5%安のキロ996円（CIF）だった。今年1～5月累計数量は前年同期比15%減の2156トン、平均単価は5%安の1007円。

スケコ生産3年連続5万ト超 潤沢な原料事情
明太子・タラコメーカーの対応は (7月8日みなと新聞)

明太子やタラコの原料となる冷凍スケコ（スケソウダラ卵）の今年上半期の供給量は、2大産地のロシアと米国を合わせ、前年同期並みの5万6000トン程度になりました。5万トンを超える潤沢な新物生産が、3年連続続いた格好です。今年上期の推定生産量は、ロシア産が前年同期並みの3万5000～3万6000トン。米国産は前年同期比7%増の2万1000トンでした。

ロシア産原料 韓国の釜山で行われたロシア産の入札は、3月から本格化しました。ロシア運搬船による搬入が順調に進む中、日本向けスタンダード（STD＝上級品）の落札価格（米ドル建て）は序盤から前年同期に比べて全面安の展開。その後、模様眺めをしていた商社が手当てに動いたため、5月に入って市況は下げ止まりました。

(次ページ左欄上に続きます)

米国産原料 米国のアラスカスケソウ漁Aシーズンは前半、生産が順調に進み、特に序盤は例年に比べて大型な卵が目立ちました。後半になってキングサーモン混獲回避のために漁場が北上した影響があり、卵が小型化したとのことです。同国産の平均落札価格は、スタンダード、セカンドスタンダードが前年比でキロ100円安の水準。供給が減った小型サイズや水子は70円安水準となりました。

ロシア産、米国産とも、入札価格は良品に比べて裾物の下げ幅が小さくなりました。

製品の販売動向 原料供給が潤沢な中、良品の入札価格が下がった背景には、贈答需要の縮小があります。中元や歳暮を贈る習慣が年々薄れているため、良品の需要は容易に増えません。しかも、多くのメーカーにとって物量的にメインの販売先となる量販店（スーパーや生協）は、切れ子や一口カット製品といった安価な製品を中心に販売しています。

みなと新聞の取材によると、多くのメーカーは昨年までの原料価格上昇、人件費その他のコスト上昇分をいまだに自社の製品価格に転嫁し切れていないようです。明太子やタラコは昨年までに生産された原料在庫を使うケースが一般的なため、今年の新物価格が多少下がっても、製品価格のさらなる値下げは簡単ではありません。とはいえ塩干水産物全般の値上がりが続く中、量販店にとって切れ子や一口カットの明太子・タラコは確実に売り上げが見込める重要商材です。低価格品の需要には、根強いものがあります。

販路拡大の動き こうした中、製品の生産者サイドは販路拡大に力を入れています。タラコメーカーが集積する北海道の古平（ふるびら）町には4月、タラコをテーマにした日本初の「ふるびらたらこミュージアム」がオープンしました。タラコの歴史や製法を学べるコーナー、タラコを使った料理が食べられるレストラン、物販コーナーなどが入っています。

さらに進む「惣菜化」 もう一つ、メーカー各社が力を入れているのが、製品のより一層の「惣菜化」です。

料理素材としての明太子やタラコにさらに手を加え、もっと手軽に食べられる形で提供しようという試みです。福岡市のメーカー、**山口油屋 福太郎**は3月、明太フランス（明太子を使った惣菜フランスパン）に特化した専門店を地元百貨店の岩田屋本店に出店しました。同社はこれまでも自社直売店などで明太フランスを販売していますが、明太フランスの専門店を出したのは初めてです。コメの消費が総じて減少傾向になる中、パンとのコラボに活路を見出す狙いです。やまやの物販店「YAMAYA BASE」もこれまで明太フランスの販売に力を入れてきました。明太子・タラコの惣菜化に取り組むのは、メーカーだけではなく。生協のコープさっぽろ（札幌市）は、店舗の水産売り場で販売する弁当やパスタでの明太子やタラコの利用を積極的に進めたい意向です。惣菜部門出身の水産バイヤーがこれまでの経験を生かし、さらなる消費拡大を図ります。

天然クロマグロ入荷25%減 境港産の場外取引拡大 豊洲6月国内生鮮大物 （7月10日みなと新聞）

時事通信社が集計した東京・豊洲市場6月の生鮮大物売り場、国内物の入荷本数は2673本と前年同月比で27・8%減少した。クロマグロの天然物とメバチ、キハダは前年を下回り、マグロの養殖物は前年並みだった。クロマグロ全体の入荷本数は前年同月比24%減の2591本で、このうち、天然物は25%減の2447本だった。この時期の中心となる巻網物の入荷が不振で、鳥取・境港産が751本（前年同月1362本）と大きく前年を下回り、宮城・塩釜産は入荷が途切れた（同437本）。境港産は、大手スーパーとの直接取引などが軌道に乗るなど、場外相対取引の拡大が減少の要因。なお、今季の巻網物で注目されたのは、生鮮出荷の他、短期養殖向けも含めた巻網漁獲後の魚体選別作業の中で

「弱って瀕死（ひんし）のマグロに、電気ショッカーを使用して一気に絞める処理を導入した」（卸会社）ことだという。境港産の他、最終水揚げ地となる京都・舞鶴産も10本が入荷した。従来の水中で弱って死んだ魚に比べ、「色持ちや身質が向上した」（同）ことで評価が上がり、産地、消費地とも取引価格が底上げされている。延縄物主体の各産地からの入荷状況は、沖縄産が89本（同207本）、山形産が61本（同110本）、秋田産が63本（同71本）、鹿児島産が25本（同60本）といずれも減少。釣物主力の産地も、壱岐などの長崎産が149本（同249本）、日本海側主体の青森産が134本（同170本）と前年を下回った。青森産のうち、大間産は計13本で、延縄は3本だった。一方、延縄、釣物が混在する萩、仙崎、下関などの山口産は231本（同24本）と急増した。定置網物は地域によって増減に差が開いた。能登や七尾などの石川産が194本（同75本）、京都・舞鶴産は84本（同13本）、富山産は59本（同8本）と増加。一方、比較的漁場が近い福井産は17本（同42本）と減少した。なお、記録的な豊漁だった佐渡産は「獲れ過ぎのため早めに漁を切り上げた」（産地関係者）ことも響き196本（同197本）と前年並みにとどまった。定置網物で最多は北海道・噴火湾産で231本（同128本）と1・8倍に急増。山陰筋は島根産が52本（同36本）と増加した。サイズ別のセリ値（発表値の平均）は、巻網物以外の大型（100キロ以上）がキロ3885円で前年同月比19・7%安、中型（100キロ未満40キロ以上）が3889円で8・4%安、小型（40キロ未満）は2318円と2・9%高だった。噴火湾や佐渡などの定置物が比較的高値で推移した一方、沖縄や壱岐産の延縄、釣物相場が伸び悩み、大、中型は値下がりした。巻網は、大型が2396円と4・3%安、中型が同2424円と3・9%高、小型が1722円（前年はできず）だった。月間の最高値は24日に入荷した噴火湾・北海道産の定置物（46キロ）で、2万6000円だった。

養殖物セリ場相場前年並み 養殖マグロのセリ場売りは144本（前年同月147本）と前年並み。産地別の内訳は、主力の長崎産が98本（同88本）、高知産が14本（同22本）、鹿児島産が12本（同10本）、三重産が4本（同27本）など。前年はなかった舞鶴産が12本、愛媛産が2本、島根産が2本入荷した。この舞鶴産と島根産は、巻網物の「電気ショッカー絞め」とほぼ同じ処理がされた魚で、養殖いけすに活け込み後に処理されたことから養殖魚として出荷されたもよう。舞鶴産2本（121、89キロ）の相場のみが発表されキロ2000円だった。通常の養殖物の実勢取引価格は、70キロ上サイズが3500～3300円、50キロ上が同3200～3000円、40キロ下は同3000～2800円前後。

メバチ7割減セリ値3割安 メバチ全体の入荷本数は31本（前年同月110本）と前年同月比71・8%減少。主力の那智勝浦産が15本（同54本）に減少し、小笠原産も13本（同16本）と低調だった。この他、前年はなかった銚子産の巻網物が3本入荷した。発表されたセリ値の平均はキロ1147円と27・3%安だった。キハダ全体の入荷本数は51本（前年同月185本）と前年同月比72・4%減少。三宅島、八丈島などの伊豆諸島産が42本（同173本）と落ち込んだことが主な要因。前年はなかった宮崎・油津産の入荷が再開したが、9本と少なかった。発表されたセリ値の全体の平均は、キロ1100円と10・3%高だった。

天然ミナミマグロ急増 豊洲6月輸入生鮮大物販売は豪産中心に苦戦

（7月11日みなと新聞）

時事通信社が集計した東京・豊洲市場6月の生鮮大物売り場、輸入物の入荷本数は1670本（前年同月829本）でほぼ倍増した。メバチは前年並みだったが、天然のクロマグロとミナミマグロが急増した。

クロマグロ全体の本数は191本（同24本）で約8倍に増加。前年に入荷のなかった韓国産巻網物が145本まとまったのが最大の要因。その他の入荷状況は、天然物のニュージーランド（NZ）産が29本（同14本）、オーストラリア産が9本（同6本）と養殖物のメキシコ産が8本（同3本）の3産地のみで、いずれもわずかながら増加した。北米物のお荷はなし（同ボストン産1本）。ギリシャなど地中海産も2年連続で入荷がなかった。韓国産巻網物は月末30日のみの入荷。例年より大幅に遅れての入荷となったが、「産卵を終えたばかりのような魚が多く含まれていた」（卸会社）と身質評価は極めて低く、比較的良品だった数本にキロ1500円が付いた程度だった。豪産は同産の天然ミナミマグロと同様、身質評価が振るわず、セリ成立は1本（キロ3300円）のみにとどまった。一方、NZ産は一部の上品が評価され、高値はキロ1万3500円（同1万円）、平均値も7200円（同5933円）と上伸した。養殖のメキシコ産は相場未発表。ミナミマグロは天然物のみで1394本（前年同月721本）と約93%増加。豪産が1168本（同628本）に増加した他、NZ産も221本（同93本）と、不漁により低調だった前年から回復した。この他、メバチとの混獲物とみられるケーブタウン産が5本あった（同入荷なし）。豪産は月末に近づくにつれ徐々に入荷が増えたが、品質面では「くすんだ赤身系の魚ばかり」（卸会社）、「去年の魚より一段と身質が落ちた」（仲卸）と厳しい評価だった。高値はキロ6800円（キロ7700円）、平均値は3570円（同3528円）だったが、相場発表されたのは70本と全体の1割に満たず、未発表分の中には1000円程度の安値で売り急がれた物が多かった。販売不振な状況でも集荷が続いた理由として、「豪州国内と北米向けの需要が頭打ちで、日本行き以外に選択肢がなかった」（輸入業者）ことなどが挙げられる。メバチは全体で84本（前年同月83本）と前年並みだった。主力は豪産で52本（同74本）に減少したが、ケーブタウン産が26本（同8本）に増加した。

(右欄上に続きます)

この他、ニューカレドニア産が6本あった（同入荷なし）。豪産は順調に買い手が付いたが、相場発表されたのはキロ3200円以上の好値が付いた5本のみ。ケーブタウン産は例年より並品が目立ち、高値は3900円（キロ4400円）、平均値は2527円（同3820円）と前年を下回ったが、国内物の品薄や天然ミナミマグロの良品不足を受け、買い気はおおむね良好だった。（時事）

初物サンマ 88万8888円 札幌市場
流網物に史上最高値

(7月11日みなと新聞)

【札幌】3年ぶりに道東に水揚げされた流網漁の初物サンマが11日に札幌市場でセリにかけられ、1・1キロ版6尾入り1箱（1尾170～180グラム）にキロ当たり88万8888円（税別）が付き、同市場の最高値を更新した。流網漁は8日解禁。出漁した小型船1隻が10日、釧路副港に約170キロを水揚げ。近年は資源減少と温暖化による漁場沖合化で水揚げは減少傾向が続き、2023、24年と流網の漁獲はなかった。この日の札幌市場にはカネシメ高橋水産、丸水札幌中央水産合わせて62キロ（61箱）が上場。前年初荷は棒受網船出漁後の8月17日で最高値はキロ40万円だった。およそ1カ月前倒しの商戦幕開けに場内は沸いた。

店頭価格は1尾9万9999円 史上最高値を付けた1箱の出荷者はマルサ笹谷商店（釧路市）で丸水札幌中央水産が上場。仲卸・星野水産が落札し、市内の鮮魚小売店・吉本水産が仕入れた。吉本水産が出店するキテネ食品館手稲店では1尾9万9999円で販売した。それまでの最高値だった18年流網物のキロ50万円を大きく上回った。「過去十数年で一番、形も大きく、きれいなサンマで更新は予想はしていた」と丸水札幌の宮崎烈史取締役専務執行役員。カネシメの最高値は富樫水産（釧路市）の0・5キロ版3尾入りキロ34万円だった。

(次ページ左欄上に続きます)

この他の両卸大相場（1キロ版）は、6尾23万～9万円▽7尾9万～5万5000円▽8尾2万8000～2万5000円など。「全体的に品質が良く、上物から下物まで高値がついた。7月にサンマが揚がると商戦が盛り上がる。今後に期待したい」（カネシメの植野徳紫執行役員常務）

【さかなの動き】冷凍カツオ PS相場強含み焼津 小型多く生産増やせば （7月14日みなと新聞）

冷凍カツオのうち、焼津漁協（静岡県焼津市）で海巻船が主に生食向けとして漁獲するブライン凍結特別選別品（PS）は7月中旬現在、4・5キロ上は先月同期より10円高のキロ270円、2・5キロ上は20円高の290円、1・8キロ上は10円高の280円で推移する。近海漁場の生カツオが振るわず、冷凍物の需要は高いが、「南方漁場の漁獲は上向かない」（商社筋）。漁獲主体は1・8キロ前後の小型が多く、海外巻網船はPS原料の生産比率を増やせない事情がある。カツオは例年、近海で獲れる「上りカツオ」の漁獲が増える。量販店も生カツオを積極的に販売する時期だが、漁獲量は前年を下回る水準だ。南方漁場も昨年12月から低調かつ、小型中心の漁獲が続く。PS原料には不足感があり、相対相場が上昇した。遠洋一本釣船は、7月上旬時点ではビンナガを狙い操業する。生鮮物と合わせて潤沢な水揚げだが「漁自体は終盤ではないか」と産地関係者。「ビンナガも決して安くはない。（ビンナガが）カツオの代替という雰囲気は今のところない」と話す。関係者によると、一部の船はビンナガ漁から切り替え、南方の中南漁場に向かったという。

【養殖産地市況】養殖ブリ 鹿児島浜値100円上昇1400円 （7月14日みなと新聞）

鹿児島県内の養殖ブリ（中心サイズ2～3キロ）の中心浜値は

（右欄上に続きます）

7月上旬、前年同期比450円高のキロ1400円と前月から100円値を上げた。中心サイズは例年より小ぶり。人工種苗の魚の中心サイズは3キロだが、天然種苗由来ははまだ2キロ。人工種苗の魚は早期に売れることから「例年より小ぶりの傾向はしばらく続くだろう」（産地筋）。販売動向については「高値感から鈍い動き。季節的に販売が停滞する時期ではある」（同）。今後の価格動向については「今年は、いかに浜値を安定させるかが課題。冬季になっても大きく値崩れしないよう望む」（同）。
養殖カンパチ 50円値上げ1700円 鹿児島県の養殖カンパチ主要産地の基準浜値は7月上旬、キロ1700円と前月から50円値を上げた。前年同月比は150円高となっている。販売状況について産地筋は「高値感からやや鈍い状況。前月と変わらず」と話す。今年は梅雨が短く春から一気に真夏になったような異常気象。現在池については「在池量は少ない。急激な水温変化に魚が驚き食欲が減退した印象。中心サイズははまだ1尾4キロ以下」と話す。例年この時期、新物販売が始まるが今年は「盆前ごろになる見通し。尾数はさらに減るだろう」（産地筋）。

養殖マダイ 930円で浜値保合い愛媛産 養殖マダイの産地相場は高値安定が続いている。愛媛県産養殖マダイの7月初旬の産地相場は、ほぼオールサイズでキロ930円。この相場は13カ月連続。900円台の相場は2022年9月から35カ月連続である。物価が上昇する中で、消費者の節約志向も強く、消費の動きはあまり良くない。コストアップインフレの中では、値下げは難しい。今後も高値相場は続くと思われる。愛媛県漁協の担当者は「相場は変わっていない。物価が上がっており、消費の動きはあまり良くない。天然物の水揚げも増えてくるが、相場は当面、保合いが続くのではないか」と話す。一方、養殖マダイの5月の韓国向け輸出量は前年同月比12・8%増の580トン。金額は13・2%増の5億7947万円。平均単価は4円高の999円。

（次ページ左欄上に続きます）

【養殖 消費市況】養殖ブリ 「最高値更新」
豊洲市場 2キロが減り3キロ中心 (7月14日みなと新聞)

7月上旬現在における東京・豊洲市場の養殖ブリの中心卸値は、前月並みから50円高のキロ1750～1600円となった。前年同期比では7割高。ある卸は「過去最高値を更新した」と説明する。入荷量は前年同期比3～4割減の水準。産地は高知中心で、一部鹿児島からも入荷があった。サイズは1尾2～3.5キロ前後だった。卸は「2キロが減って3キロが中心」「生産者の水揚げタイミングで変化がある」などと説明する。養殖カンパチの中心卸値は前年同期比2割高の2000円だった。サイズは1尾3～4キロ。刺身商材として引き合いがある。ある卸は「活魚の値上げが厳しく、産地締め切り替える動きがある」と話す。活締めは1～3割高のキロ2500～2100円だった。養殖マダイの中心卸値は前年同期並みの1000円だった。サイズは1尾1～2キロ。入荷ペースは前年同期並みから1割減。卸は「値段が安定して量販店から引き合いがある」「天然物と競合している」と指摘が出る。

大阪本場 養殖カンパチ高値上昇 引き合い弱い

大阪本場の7月上旬の養殖ブリ（産地締め）のキロ当たりの中心卸値は保合いの1600円で推移している。産地は高知と鹿児島、大分の各県で、平均サイズが3～4キロ。荷動きは総体的に鈍い。業務筋が使用するラウンドは前年並みだが、スーパーが使うフィレーが低調だ。スーパーは相場が高いため、品ぞろえを抑えているようだ。今後の相場は浜値次第だが、続伸で推移しそう。養ハマチ（活魚）は保合いの1700～1600円。平均サイズは2～3キロ。主な産地は高知県。飲食店などの固定客が買い付ける。今後の相場は強含み。養カンパチ（活魚）は2400～2000円で、高値は150円アップしたが、安値は保合いだった。浜値が上がっており、高値が上がった。 (右欄上に続きます)

産地は高知、愛媛、鹿児島、宮崎などの各県で、平均サイズは3.7～3.8キロ。高値安定で引き合いは弱い。今後の相場は当面保合いだが、「お盆前に浜値が上がりそうで、相場は上がるかもしれない」と見通す関係者もいる。養マダイ（活魚）の中心卸値は保合いの1350～1050円。平均サイズは1.5キロで、主産地が愛媛、高知、熊本、和歌山などの各県。高値に加え、他の食品の値上げなどによる物価高によって、荷動きは弱い。今後の相場は保合いと見通す。

西巻マアジ6月も豊漁**九州北部の冷蔵庫満杯** (7月14日みなと新聞)

西日本巻網船団（大中型）マアジ（1尾80グラム超）漁は6月、過去7年の同月で最も多い水揚げを記録した。5月に続く豊漁で、九州北部の冷蔵倉庫はほぼ満杯となっている。今年6月の長崎市、長崎県松浦市、佐賀県唐津市、福岡市を合わせた同魚水揚げは22万箱（1箱約16キロ）。近年の同月平均水揚げ15万箱を大きく上回った。特に今年は過去10年で最高だった5月の水揚げ（35万箱）から続く2カ月連続の記録的豊漁となった。サイズ別では需要が高い生切り向けサイズ（1尾80～120グラム）が8割超。鮮魚向け（同120グラム超）が2割未満となっている。中心浜値は、生切り向けが安定した水揚げから前年同月比2割安の1箱3000円と、求めやすい価格。半面、鮮魚向けは水揚げの伸び悩みから同2割高の約6000円だった。産地筋は「7月の漁もマアジ主体だが冷蔵庫は満杯。あまりの豊漁で水揚げを抑制しなければならないほどだ」と話す。

マグロ情報 豊洲6月 赤身相場が堅調気配**売り急ぎ控える傾向に** (7月15日水産経済新聞)

豊洲市場における6月の冷凍大バチ（40キロ上）の上場本数は1万828本で、前年同月から11%の減少に転じた。刺身用の冷凍赤身（メバチ、キハダ）は運搬船が搬入する端境期を迎えており、売り急ぎを控える傾向にある。 (次ページ左欄上に続きます)

数量が最も多い西経・太平洋銘柄（6120本）の公表値キロ当たり中値は1018円（前年同月比2%高）で、5月の1007円からわずかに値上がりした。運搬船やコンテナ便からの荷を受け入れる超低温冷蔵庫は、引き続き地中海沿岸国から養殖クロマグロの搬入や、間もなく始まる豪州産養殖ミナミマグロのスペース確保もあり、逼（ひっ）迫した状態に変わりはない。ただし、運搬船の荷下ろし対応が改善され、待機時間は昨年までと比べ大幅に減少。むしろ台湾船の減船の影響から、今後は搬入量の減少が予想される。そのうえで夏の旧盆需要や、その先も見据えた原魚の確保もあり、赤身の引き合いが強くなってきた。豊洲市場の卸担当者は「底値・中値がしっかりし出した」と、印象を語る。6月は宮城・塩釜の生鮮クロマグロ水揚げにブレーキがかかったことも、冷凍マグロにはプラスに働いた。冷バチのインド洋台湾船の一船買い価格（外貨）は、6月に入り40キロ上が800円から850円へ上方修正された。豊洲市場の西経・太平洋銘柄の公表値キロ当たり中値は、2か月ぶりに前年同月を上回っており、今後もジリ高が続くと見込まれる。

天然クロまき網6割減 国内の生鮮クロマグロは、この時期に中心となる天然のまき網物が764本で、前年同月の1794本から57%減と大きく減った。境港産が大手量販店との取引を増やしたうえ、塩釜産の入荷が途切れている。はえ縄や釣りも主力産地が軒並み前年を下回った。定置網も産地により増減の差はあるが、北海道の噴火湾産が231本で、前年同月の1.8倍に増加している。輸入は韓国産天然クロマグロが145本。例年より遅く、身質の評価は低かった。天然ミナミマグロは豪州産が1168本（86%増）、ニュージーランド産は221本（138%増）に急増、低調だった前半からの巻き返しが始まっている。
(右欄上に続きます)

家計支出調査5月 魚貝類、実質減4ヵ月連続
消費全体は大幅実質減に (7月15日水産経済新聞)

総務省は4日、家計支出（家計調査報告、2人以上の世帯）の2025年5月分を発表した。消費支出全体は実質（消費者物価指数で補正して比較）前年比4.7%増と2か月ぶりの大幅増となった。伸び率は22年9月以降で最大。国内外のパック旅行費や外食などが大きく伸びて底上げした。食料は外食の貢献で2か月連続実質増と、プラス圏での推移が続く。しかし、魚介類は4か月連続で実質減だった。魚介類の支出金額は6048円で、実質0.6%減に終わった。見かけ（名目）は3.7%増だったが、インフレ基調の影響を除くと名目の伸びはこれでも物足りない。内訳では、生鮮魚介が3315円で実質0.5%減・名目3.5%増、塩干魚介が1126円で実質1.5%減・名目4.1%増、魚肉ねり製品が692円で実質1.9%増・名目3.6%増、他の魚介加工品が915円で実質1.5%減・名目3.6%増だった。生鮮魚介類のうち金額で50円以上あり名目増減（以下カッコ内）で前年比減が目立ったのは、ホタテ（39.3%減）、ハマチ含むブリ（13.3%減）、タコ（5.2%減）などだった。ブリは高騰する養殖の穴を天然で補い数量は同等だったが、金額は減少した。一方、支出金額が50円以上ある中で増加が目立ったのはタイ（13.0%増）、カツオ（12.4%増）、アジ（10.9%増）など。タイは養ブリの代わりに活発に使われた。アジも鮮魚サイズが潤沢に並んだ。

寿司2割近い伸び 塩干魚介では、明太子含むタラコ（10.2%増）が、魚肉ねり製品ではチクワ（9.0%増）が、他の魚介加工品ではカツオ節・削節（9.9%増）がそれぞれ名目増での伸び率の上位に入っている。外食の寿司は1549円（19.3%増）と3か月連続の2ケタ増で、伸び率は2割に迫った。
(次ページ左欄上に続きます)

東京都講堂（プロジェクター付）、第一会議室（モニター付）、青果棟会議室(モニターなし) が
3時間1コマ＝5,238円で借りられます。詳しくは事務局までお問い合わせください